

地球研3代目所長 安成哲三さん



「研究者と市民との交流も進めていきたい」と語る安成さん(京都市北区の地球研で)＝宇那木健一撮影

総合地球環境学研究所(地球研、京都市)の3代目所長に、アジア地域の気候、環境変動が専門で名古屋大・筑波大名誉教授の安成哲三さん(65)が就任した。社会や経済に対する価値観が揺らぎ、学問のあり方も問われる中、新たなかじ取り役はどのような方向を目指すのだろうか。

「データ統合して生かす」

地球研では資源や文明環境史など22テーマの研究が終了し、9プロジェクトが現在、進行中だ。「各分野でデータもノウハウも蓄積できており、それらを

統合して生かすことが課題」と、問題の指摘だけで終わらず、具体的な解決方法を示すことの重要性を強調する。

世界人口の6割を占めるアジアの環境問題の解決が、地球全体の問題解決につながると考えている。中国をはじめ、各地では高度経済成長期の日本のように公害が深刻化しているが、「技術や科学をどう活用するかは、価値観によって変わる。『この

ままでは地球がどうなるのか』という長期的な視点が必要」と話す。

山口県出身。小中高と神戸で暮らし、「中学・高校時代、毎

週のように六甲山に登り、自然に触れたのが研究の原点」という。京都大学では探検部に所属。半年間、企業を回って1000万円の寄付を集め、南米・パタゴニアでの古地磁気調査を実現させた、行動力をも兼ね備える。その後、大学院時代にヒマラヤで気候と氷河を観測したことが、今に続くアジアモンスーン研究の出発点となった。

研究を通じて世界各国の人と接し、コミュニケーションの大切さを知ったという。地球研の研究スペースにも早速、自身の席を用意した。所長室に籠もってしまわず、「できるだけ所員と語り合い、風通しをよくしていきたい」という願いが見て取れた。

(原田和幸)